2009 年度文学部学生アンケート集計と分析

京都大学文学研究科学生支援プロジェクト
「学生相談室プロジェクト」

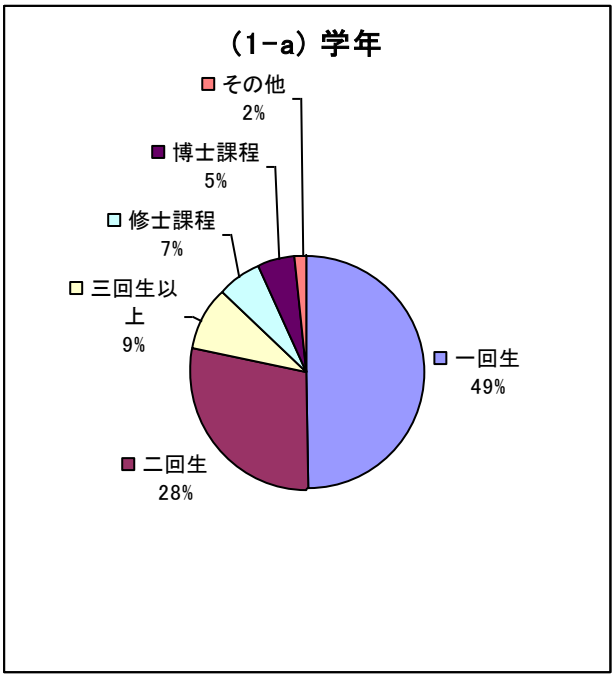
主旨

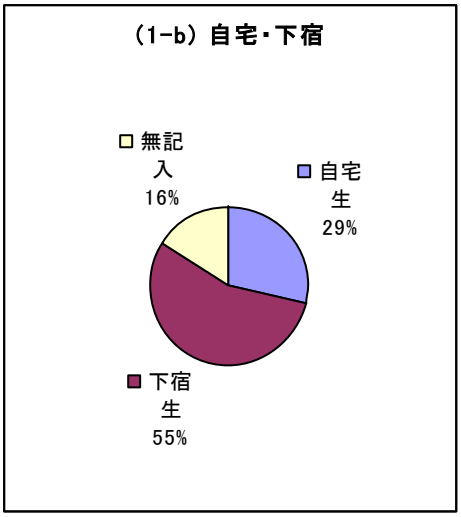
京都大学ではカウンセリングや気軽に相談できるような施設の整備が大幅に立ち後れていますが、文学部ではこの度、学生支援プロジェクトの一環として学生相談室が開設される運びとなりました。本調査の目的は、所属学生の意識調査を行い、学生の勉学・生活実情及び意識を把握し、学生支援を充実させるための基礎資料を得ることです。今回の調査は、文学部学生・院生を対象とし、平成 21 年 12 月下旬から平成 22 年 2 月上旬にかけて 1 回生英語クラス､2 回生以上の文学部英語クラス、3 回生以上は各専修の研究室において実施致しました。回答者は 351 名で有効回答率は 24％（1・2 回生に限れば、回答者 275 名・回答率 62.5％）でした。調査に協力して戴いた先生各位、そして学生諸君に感謝申し上げます。

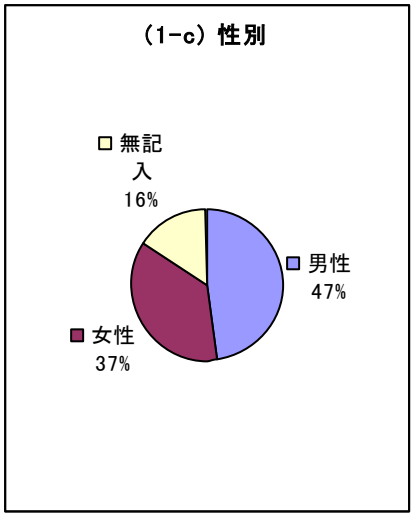
Contents

１．学生の所属と家庭状況　　２．大学生活の充実度
３．コミュニケーション　　４．満足度
５．悩みと相談（自由記述）　　６．転部・退学、センターの存在
７．「学生相談室」への要望

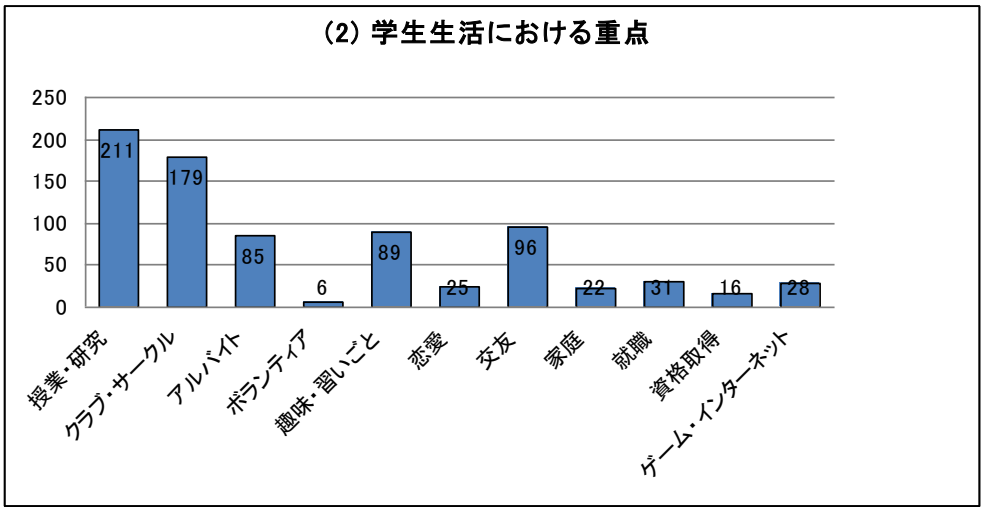
１．学生の所属と家庭状況



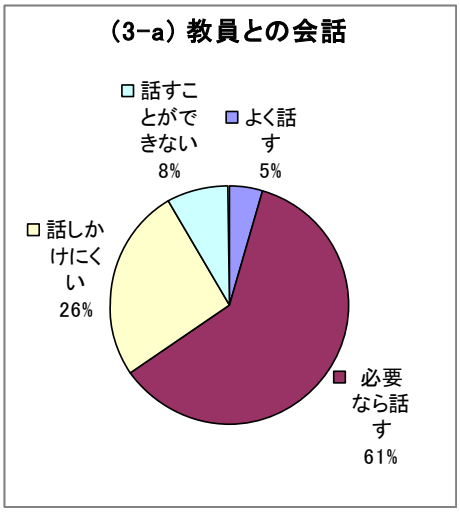


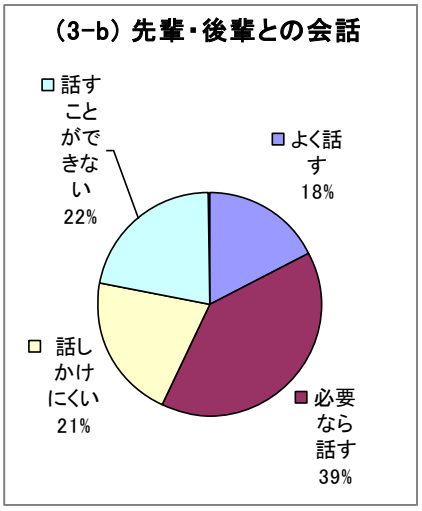


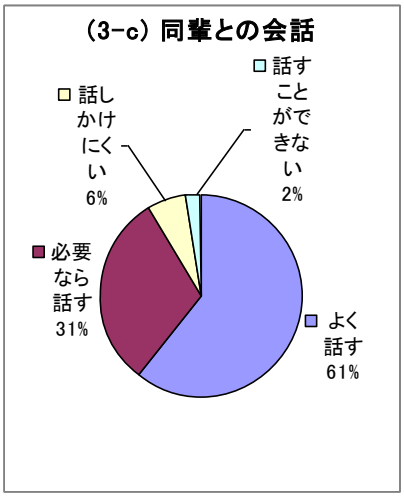
２．大学生活の充実度



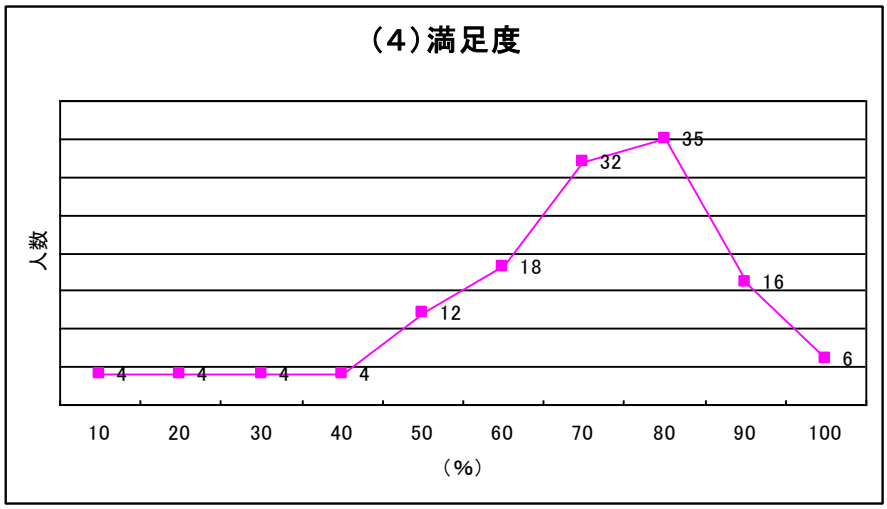
３．コミュニケーション







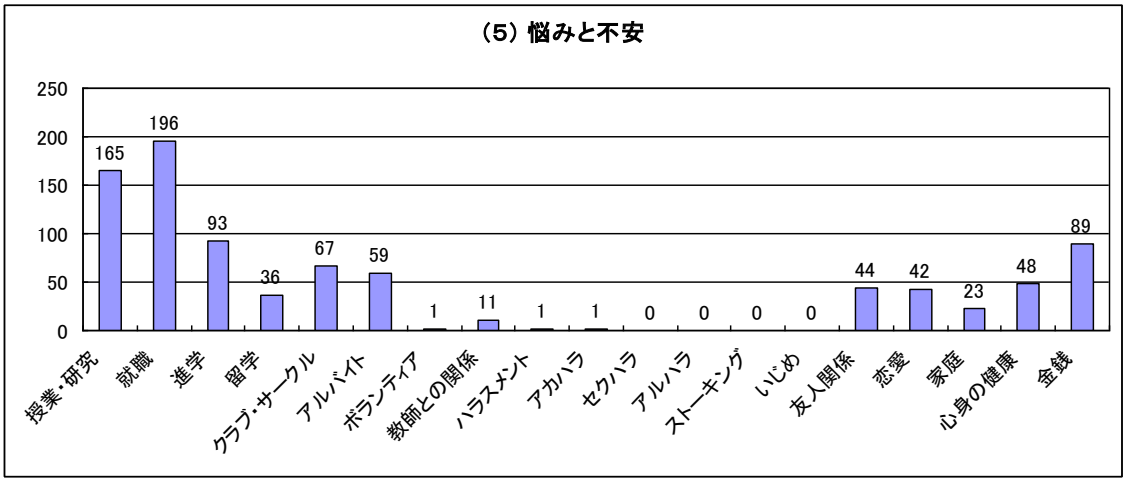
４．満足度



・１～４に関して

今回のアンケートは、各専属に移る前の学生の声を聴取することに重点を置き、その実施にあたり、共通科目については主として、ほぼ全員が受講している英語クラスにアンケートの協力をお願いした為、一回生、二回生の割合が特に多い。アンケート結果から伺えることは、学生生活における重点と悩みや不安には共通点があるということである。それは、京大文学部ならではの特色として、学業・研究への意識が高いということ、そして、就職か大学院進学かという進路選択である。また、先輩・後輩との会話で話しかけにくい割合が多かった（約半数は一回生。ただ、それを差し引いても半分弱の割合は多いと思われる）。京都大学での学生生活への満足度は（70－80%）で概ね満足している人が多い。しかし、個人的には心身の健康に悩んでいる人が多いことに留意する必要がある。

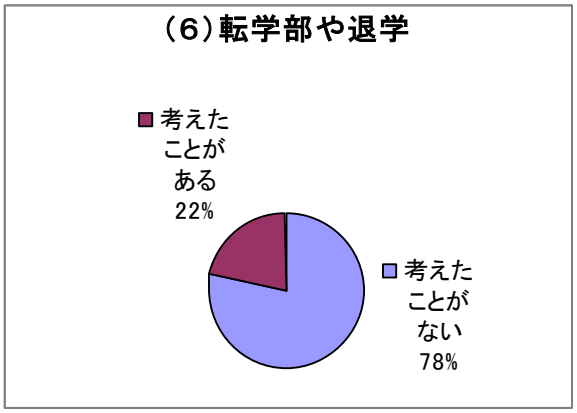
５．悩みと相談（自由記述）



・５に関して

アンケート結果から明らかになった学生の悩みは大きく二つの方向に大別出来る。一つは、現在の学生生活に対する悩みであり、二つは、自分の将来像が描けない、就職か進学かの判断に困る等、近未来の進路に関するものである。学生は、現在の学生生活における具体的なアドバイスと将来を見据えた的確な指針となるような助言を求めていることが分かる。具体例として、「(今は) 誰とでも話せるが、そのうち誰とも話せなくなること」のような悩み、「自分の将来像が描けない」、あるいは「大学院に進むかどうか（将来像も見据えつつ)」等があった。さらには、経済的な不安や研究者としての資質への不安等、きめ細かなアドバイスが求められる相談も散見された。以上から、頼りになる先輩的存在が、彼らの不安を軽減するのに少なからず威力を発揮すると考えられる。

６．転部・退学、センターの存在



・６に関して

転学部や退学を考えた人はおよそ 2 割であった。その理由としては、(a) 勉学の内容に対する不満（1：文学部に対する不満、2：他学部への興味・関心）と、(b) 将来への不安・就職の不安という傾向に大きく分けられる。以下にそのコメントの一部を挙げる。

(a-1)

文学部にやりがいを感じられない（文学部は暇。上とのつながりが薄い）。
自分が文学部で学びたいことは独学でもできる。
学部が自分に合ってないと感じたから（授業がつまらない)。

(a-2)

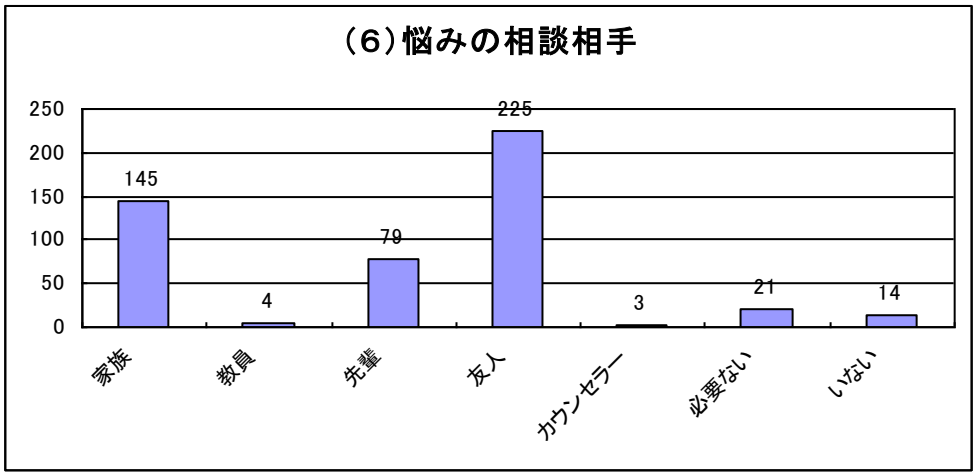
総人にひかれた。法に興味が出てきた、元々法学部や経済学部志望だった（実学を学びたい)。心理学に興味があった（臨床心理学がやりたかったから)。理系の勉強がしたくなった（理系の方が科学的で真実を多分に内包していると思った）。
農学部･薬学部への転部を考えた。

(b)

文学部での就職に不安を感じたから。卒業後の進路についていろいろと考えたため。
今後の身の処し方に不安を感じたから。

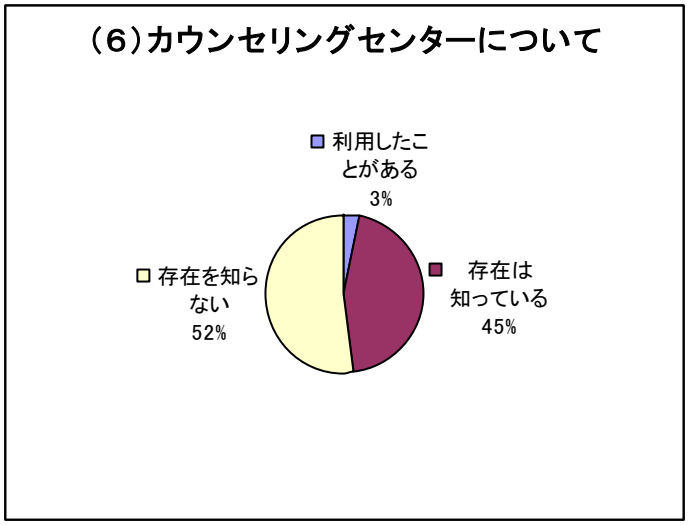
＜分析＞

文学部への不満(a-1)と他学部への関心(a-2)とは、ある意味で表裏の関係にあり、文学部に関する情報の不足が要因のひとつになっていると思われる。そのため、文学部で何ができるのかを発信していくことが重要だと思われる。また「先生から学生へ」という回路だけではなく、研究室の枠を越えた「先輩・後輩のつながり」を作り出していく方策も同時に必要であろう。(b)に関しては、これまでの文学部卒業生の就職先を発信することで、ある程度の不安は解消出来ると思われる。



・悩みの相談相手

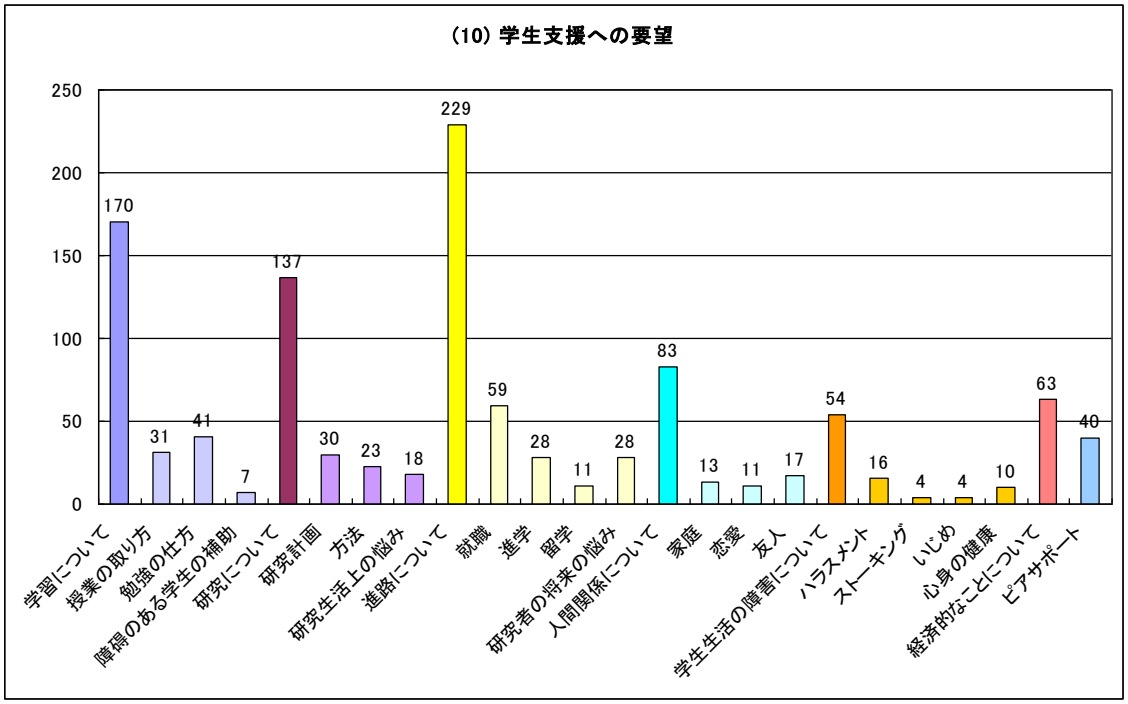
多かったのは友人（46%）や家族（30%）。教員やカウンセラーは少数に留まった。悩みの質にもよるが、大学組織が学生の悩みの受け皿になりきっていない現実が浮き彫りになった。なかでも「相談相手がいない」と答えた学生（3%）に対しては何らかのフォローが必要である。大学生活に関する悩みを気軽に相談できる仕組み作りが急務である。



・カウンセリングセンター利用

利用したことのある人は 3%と少数であったが、その存在自体は知っているという人がおよそ半数にのぼった。残りの人に対しても、大学内における相談窓口についてさらなる周知が望まれる。

７．「学生相談室」への要望



・７に関して（項目 10―学生支援室への要望、項目 11―文学部への要望）

・項目 10）

一回生、二回生ともに「進路」についての相談を希望する学生が多くみられる。なかでも「就職」および「進学」に関する悩みについての相談への期待値が高い。次いで「学習」面で、授業の取りかたや、勉強のしかたについての相談を求める声が高い。

・項目 11）

就職に関しては「二回生に、積極的にセミナーなどを開いてほしい」、「就職を考えている人への相談や説明会のようなものがあればいいのに」、「卒業生の体験談や現状を聞かせて欲しい」といった意見など、厳しい就活状況下にあって大学側の支援に期待する声がみられる。

「進学」に関して、一回生、二回生ともに「研究室の先輩・教員」との「縦の関係」や「交流」の疎遠さを訴える声が多く、専門課程との接続がうまくいっていないようである。学生相談室に対して「いきなり専門的研究分野にふみこんでいく２～３回生のための学問的基礎手続きや姿勢へのアドバイス」を求める声や、「自分の専修

の先輩への質問や相談をしやすくすること。１，２回生など専修が決まっていない回生も先輩の意見をききやすい状況は必要だと思う」といった要望があることがわかる。

＜分析＞

就職に関する不満に対して、学生相談室に可能な対策は、学生の「漠然とした不安」へのケアであると考えられる。文学部卒業生の就職状況は数字の上では必ずしも悪くはない。こうしたデータを提示することで、学生の不安を取り除くことが効果的であると思われる。進路・進学に関する不満に対しては、系分属前の段階での上級生・卒業生との交流会や、ガイダンスの実施回数を増やすことが有効だと考えられる。